

西鹿渡遺跡

— 宅地造成に伴う緊急発掘調査報告書 —

2019.7

盛岡市教育委員会

例 言

1. 本書は、岩手県盛岡市^{さんぽうみやぎ}三本柳第2地割28番1地内に所在する^{にししかど}西鹿渡遺跡の第35次発掘調査報告書である。
2. 本調査は、宅地造成工事に伴い、記録保存を目的として実施した緊急発掘調査である。野外調査は、平成30年4月9日から平成30年7月17日まで実施した。調査面積は、3,032㎡（対象面積5,194㎡）である。
3. 本調査は、事業主の株式会社アート不動産 代表取締役社長 櫻井大介氏と盛岡市教育委員会との間で締結された協定書に基づき、盛岡市遺跡の学び館が野外調査及び出土資料整理並びに報告書編集を実施した。本調査に係る費用は、事業主体である株式会社アート不動産が支出した。
4. 発掘調査及び本書の編集・執筆は、盛岡市遺跡の学び館 菊地幸裕・今松佑太が担当した。
なお、野外調査及び資料整理には、次の方々が従事した（五十音順）。
上田 公一、佐々木 あゆみ、田原 寿美恵、千葉 智子、西田 千佳、袴田 英治、
樋口 泰子、洞内 さゆり、村上 幸子、村上 美香、山下 摩由美、山田 聖子
5. 遺構の平面位置は、平面直角座標X系（日本測地系）を座標変換した調査座標で表示した。
調査座標原点 RX ± 0 ← X - 37,400.000 m
 RY ± 0 ← Y + 28,600.000 m
6. 挿図中の高さは、標高値をそのまま使用している。
7. 挿図中の土層図は、堆積の状況を重視し、線の太さを使い分けた。土層註記は、層層ごとに本文で記述し、個々の層位については割愛した。
なお、層相の観察にあたっては、『新版標準土色帖』（2013 小山正忠・竹原秀雄）を参考にした。
8. 本書中の地図は、国土地理院発行2万5千分の1地形図「盛岡」「矢幅」及び「盛岡市都市計画整備図」（平成元年）を使用した。
9. 遺構の名称及び記号は次のとおりである。なお、「竪穴建物跡」の名称は、『発掘調査のてびきー集落遺跡発掘編ー』（2010 文化庁文化財部記念物課・独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所）に倣っている。

遺構種別	記号
竪穴建物跡	R A
竪穴状遺構	R E
土坑	R D
溝跡	R G
10. 土器の区分は、土師器・須恵器・あかやき土器に分類した。「あかやき土器」の名称は、ロクロ使用の酸化炎焼成土器（環類、甗類）に使用し、ロクロ使用の内面黒色処理の環類は、「土師器」に分類した。
11. 遺跡全景空中写真撮影及び出土遺物実測図化は、（株）タックエンジニアリングが行った。
また、出土炭化物の放射線炭素年代測定（AMS測定）及び樹種同定は、（株）加速器分析研究所が行い、その結果を附章に掲載した。
12. 本調査に関する出土遺物及び記録類は、盛岡市遺跡の学び館で保管・管理している。

目 次

例 言

目 次

I 遺跡の環境	1
1 遺跡の位置	1
2 地形及び地質	2
3 周辺の遺跡	3
4 これまでの調査	3
II 調査経過	7
1 調査に至る経緯	7
2 調査方法	7
III 遺構と遺物	9
IV まとめ	35

附章

西鹿渡遺跡第 35 次調査出土炭化物の放射性炭素年代（AMS 測定）

西鹿渡遺跡第 35 次調査出土炭化材の樹種同定

写真図版

報告書抄録

挿 図 目 次

第 1 図 西鹿渡遺跡 位置図	1
第 2 図 地形分類と周辺の遺跡	2
第 3 図 西鹿渡遺跡 全体図	6
第 4 図 西鹿渡遺跡 第 35 次調査区全体図	8
第 5 図 R A 052 竪穴建物跡 (1)	10
第 6 図 R A 052 竪穴建物跡 (2)	11
第 7 図 R A 052 竪穴建物跡 遺物出土状況	12
第 8 図 R A 052 竪穴建物跡 出土遺物 (1)	13
第 9 図 R A 052 竪穴建物跡 出土遺物 (2)	14
第 10 図 R A 053 竪穴建物跡	15
第 11 図 R A 053 竪穴建物跡 遺物出土状況	16

第12図	R A 053 竪穴建物跡	出土遺物 (1)	17	
第13図	R A 053 竪穴建物跡	出土遺物 (2)	18	
第14図	R A 054 竪穴建物跡		19	
第15図	R A 054 竪穴建物跡	遺物出土状況	20	
第16図	R A 054 竪穴建物跡	出土遺物 (1)	21	
第17図	R A 054 竪穴建物跡	出土遺物 (2)	22	
第18図	R A 054 竪穴建物跡	出土遺物 (3)	23	
第19図	R A 055 竪穴建物跡		24	
第20図	R A 056 竪穴建物跡		26	
第21図	R A 056 竪穴建物跡	遺物出土状況	27	
第22図	R A 055・056 竪穴建物跡	出土遺物	28	
第23図	R E 006 竪穴状遺構		29	
第24図	R D 034～037 土坑		31	
第25図	R G 010・011 溝跡		33	
第26図	竪穴状遺構・土坑・溝跡	出土遺物	34	
第27図	西鹿渡遺跡	住居規模散布図	36	
第28図	西鹿渡遺跡	竪穴建物跡	カマド方位分布図	36
第29図	遺構間接合状況図		37	

写真図版目次

第1図版	第35次調査区 全景
第2図版	R A 052 竪穴建物跡
第3図版	R A 053 竪穴建物跡
第4図版	R A 054 竪穴建物跡
第5図版	R A 055 竪穴建物跡
第6図版	R A 056 竪穴建物跡
第7図版	R E 006 竪穴状遺構・R D 034～037 土坑
第8図版	R G 010・011 溝跡
第9図版	R A 052 竪穴建物跡 出土遺物 (1)
第10図版	R A 052 竪穴建物跡 出土遺物 (2)
第11図版	R A 053 竪穴建物跡 出土遺物
第12図版	R A 053・054 竪穴建物跡 出土遺物
第13図版	R A 054 竪穴建物跡 出土遺物
第14図版	R A 054～056 竪穴建物跡 出土遺物
第15図版	竪穴状遺構・土坑・溝跡 出土遺物

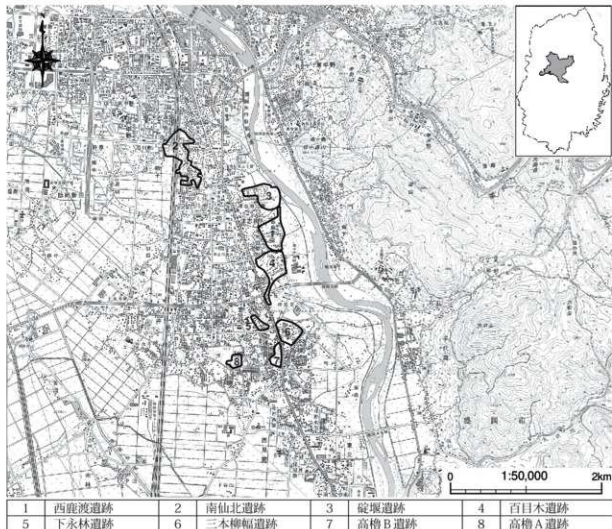
I 遺跡の環境

1 遺跡の位置

岩手県盛岡市は、県土のほぼ中央に位置している。市域の北側を岩手町・葛巻町、東側を岩泉町・宮古市、南側を矢巾町・紫波町、西側を八幡平市・滝沢市にそれぞれ接している。岩手県の県都として、人口約30万人、総面積約886.47km²を測る。

西鹿渡遺跡は、JR東北本線 仙北町駅から南東に約2.5km、盛岡市三本柳第2地割地内に所在する。遺跡の北方約0.6kmには、盛岡第四高等学校が位置し、南方約0.3kmには、赤十字病院が所在する。遺跡の範囲は、北上川と国道4号線に挟まれた東西約300m、南北約400mで、北東端が突端状に突き出ている形態を呈している。

本遺跡及びその周辺は、かつては畑地や果樹園が多く点在していたが、近年は宅地化が顕著となり、本遺跡内のほとんどが住宅地である。今次調査地点は、宅地化されていない箇所、現況は畑地である。

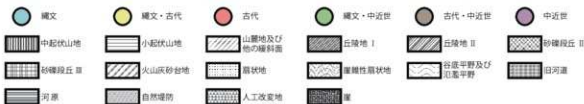
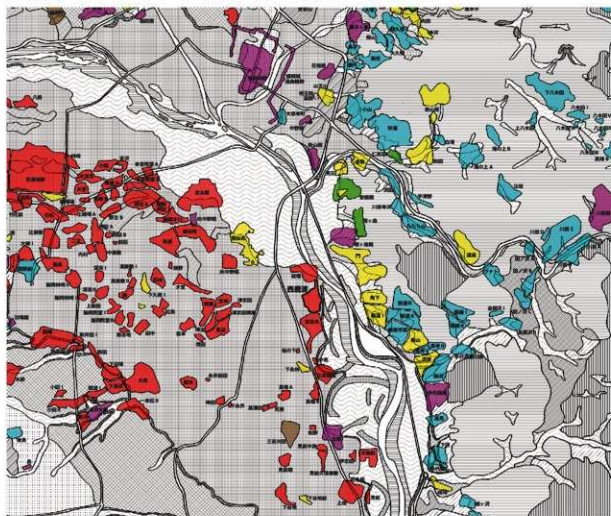


第1図 西鹿渡遺跡 位置図

2 地形及び地質

本遺跡の東側には東北地方最大河の北上川が縦断し、その両岸には谷底平野が形成されている。北上川西岸では、さらに台地が広がっている。この台地は扇状地や旧河床が段丘化したものと考えられ、特に、中・低位段丘が広面積を占めている。本遺跡は、この低位段丘の北東端部に立地している。台地の西方には奥羽青陵山地の一部をなす東根山山地等が控えており、この東麓部には大規模な複合扇状地が発達し、段丘面へと移行している。一方、北上川東岸は、段丘の発達は不良で、小起伏山地の手代森山地や佐比内丘陵が広がっている。

北上川と本遺跡の北を西流する雫石川は流路の転換が顕著で、北上川西岸と雫石川南岸には細かい旧流路跡が網状に残存している。本遺跡もその旧流路に四方を画されている。



第2図 地形分類と周辺の遺跡

3 周辺の遺跡

盛岡市内には、旧石器時代から近世までの遺跡が所在しているが、このうち、本遺跡が所在する雫石川南岸から北上川西岸の区域には、古代の集落跡が数多く点在している。

本遺跡の南方約0.1km、旧河道を挟んで百目木遺跡が所在する。これまでの調査で、奈良・平安時代の竪穴建物跡が100棟以上確認されている大規模集落跡である。分けても昭和53年に行われた第1次調査は、大型ショッピングセンター建設に伴う事前調査として旧都南村教育委員会が実施したもので、奈良・平安時代の竪穴建物跡80棟、縄文時代の土坑6基等を検出し、当該遺跡が奈良・平安時代の大規模集落跡であることが判明した知見である。

本遺跡の南西約1.6kmには、高檜A遺跡が所在する。平成16・18・21年の3ヶ年に隣接しあう3地点を調査した結果、奈良時代末から平安時代初頭の竪穴建物跡34棟をはじめとする遺構が検出された。竪穴建物跡のカマド方位は、北と北西が大勢を占め、該期の特徴を示している。建物跡の規模の観点からは、一辺5m以上的大型住居と中・小型住居がセットとなって集落を形成したことが窺え、この点においても該期の特徴が看取される。

本遺跡の南西約1.0kmには、下永林遺跡が所在する。古くより蝦夷塚の伝承がある地域で、昭和10年には、当地周辺で蕨手刀1振が出土している。大道西古墳とも呼称される遺跡である。平成28年から継続して実施されている調査で、古墳の円形周溝12基が確認された。いずれも後世の削平により主体部は確認されなかったが、全容が判明しているもので、径約10mを測る。周溝埋土上層で確認された十和田a降下火山灰及び周溝内出土土器等から、8世紀後葉～9世紀前葉の帰属が想定される。当該地域における墓域の存在を示唆する知見である。

本遺跡の北西約1.0kmには、南仙北遺跡が所在する。これまでに40回の調査が行われているが、殊に盛岡南新都市開発整備事業に伴う事前調査の件数が顕著である。調査の結果、古代の竪穴建物跡、土坑、溝跡等の遺構が検出された。また、現在の市道に並行して走行する近世以降の道路状遺構も確認されている。遺物は、土師器、須恵器、鉄製品等が出土しており、特徴的な遺物として、墨書土器が出土している。

4 これまでの調査

本遺跡は、昭和55年、旧都南村教育委員会が実施した第1次調査を嚆矢とし、今次調査まで、本調査13回、試掘調査19回を実施している。

第1次調査は、宅地造成工事に伴う事前調査として、昭和55年に実施した。調査の結果、奈良時代の竪穴建物跡1棟、平安時代の竪穴建物跡1棟、時期不詳の竪穴建物跡1棟等の遺構と、奈良時代の土師器 坏・甕、平安時代の土師器 坏・甕、須恵器 坏等の遺物が検出された。

平成15年に実施した第18次調査は、宅地造成工事に伴う事前調査として、約2,200㎡を対象とした。その結果、奈良時代の竪穴建物跡13棟、平安時代の竪穴建物跡4棟等の遺構と、土師器、須恵器、土製紡錘車、鉄鍬等の遺物が確認された。

第25次調査は、本調査区の東側に位置し、福祉施設建設に伴い実施したものである。調査の結果、

奈良時代の竪穴建物跡 1 棟、平安時代の竪穴状遺構 1 基等の遺構と、土師器 環・甕、あかやき土器 坏等の遺物が確認された。竪穴建物跡は、北西方向のカマドを有し、一辺約 2.7m の小型住居であった。

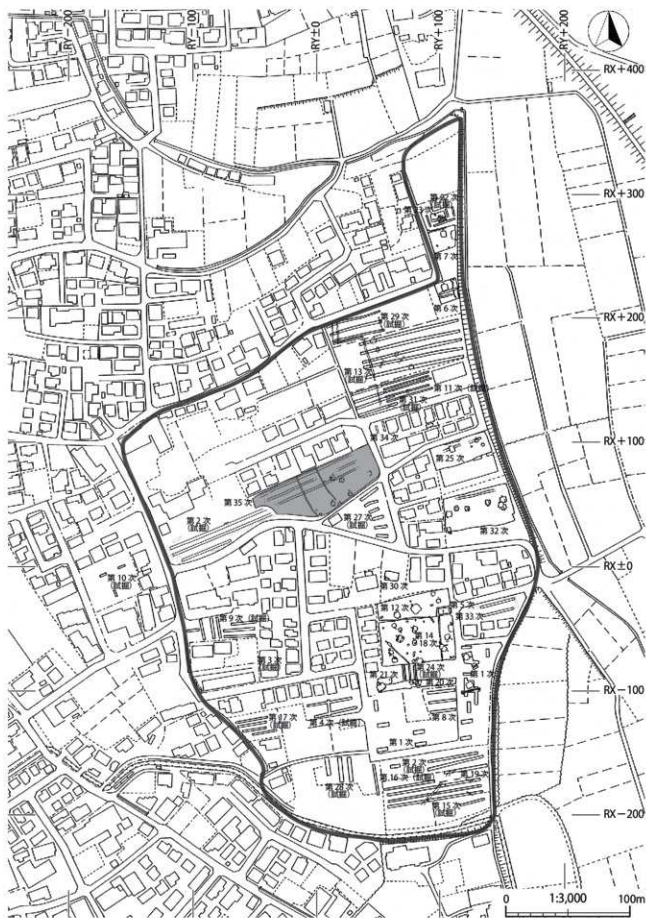
第 32 次調査は、本遺跡の東端に位置し、宅地造成工事に伴う事前調査として約 1,600m を対象として行い、奈良時代の竪穴建物跡 6 棟、平安時代の竪穴建物跡 2 棟が検出された。盛岡周辺における奈良時代の竪穴建物跡は、北～北西壁にカマドを有するのが大勢を占めるが、当該調査で確認された該期の竪穴建物跡 6 棟のうち 5 棟は南カマドであることが特徴である。本遺跡の様相の一端を示す知見である。

本遺跡は、奈良・平安時代の集落跡と想定されるものの、従前の調査例は、試掘調査や個人住宅建築等に伴う小規模な発掘調査が大勢を占めているため、遺跡の様相については、明確にしえない部分が多い。さらなる類例の増加が待たれるところである。

西鹿渡遺跡調査一覧

回数	区分	所在地	調査原因	面積 (㎡)	調査期間	主な検出遺構
1	本調査	三本柳 2 地割地内	宅地造成	1,000	1980.7.20 ～ 8.14	奈良時代の竪穴建物跡 1 棟、平安時代の竪穴建物跡 1 棟、時期不詳の竪穴建物跡 1 棟
2	試掘	三本柳 2 地割 28-1.2	宅地造成	652	1993.8.18 ～ 8.19	奈良・平安時代の竪穴建物跡 12 棟、土坑 4 基、古代以降の溝跡 4 条
3	試掘	三本柳 2 地割地内	宅地造成	100	1993.6.16	遺構・遺物 なし
4	試掘	三本柳 2 地割 42-8 外	宅地造成	172	1993.12.20	遺構・遺物 なし
5	本調査	三本柳 2 地割 36-2	防火水槽建設	63	1994.9.1 ～ 9.3	奈良時代の竪穴建物跡 1 棟、土坑 2 基
6	本調査	三本柳 2 地割 22-7	個人住宅建築	291	1995.7.4 ～ 7.11	奈良時代の竪穴建物跡 1 棟、土坑 1 基、時期不明の溝跡 1 条
7	本調査	三本柳 2 地割 16-5.6.36	個人住宅建築	393	1995.8.18 ～ 9.5	縄文時代の土坑 1 基、奈良時代の竪穴建物跡 3 棟、土坑 3 基、古代の溝跡 1 条
8	試掘	三本柳 2 地割 39-1	共同住宅建築	54	1997.11.11	遺構・遺物 なし
9	試掘	三本柳 2 地割 47-5	宅地造成	268	1997.11.28	遺構・遺物 なし
10	試掘	三本柳 3 地割 5-2	共同住宅建築	68	1998.2.12	遺構・遺物 なし
11	試掘	三本柳 2 地割 36-1.5	共同住宅建築	196	1998.8.17	平安時代の竪穴建物跡 2 棟
12	本調査	三本柳 2 地割 36-2.5.6	宅地造成	970	2002.10.1 ～ 12.2	奈良時代の竪穴建物跡 5 棟、土坑 3 基
13	試掘	三本柳 2 地割 25-1	共同住宅建築	820	2002.7.23 ～ 7.25	奈良時代の竪穴建物跡 5 棟、時期不明の溝跡 3 条
14	試掘	三本柳 2 地割 36-1.3.4	宅地造成	555	2002.7.29 ～ 7.31	奈良時代の竪穴建物跡 13 棟、時期不明の溝跡 1 条
15	試掘	三本柳 2 地割 39-2 外	宅地造成・共同住宅建築	501	2002.11.25 ～ 11.28	古代の土坑 2 基、溝跡 4 条
16	試掘	三本柳 2 地割 39-43 外	共同住宅に伴う擁壁設置	68	2003.4.14	遺構・遺物 なし
17	試掘	三本柳 2 地割 42-1	共同住宅建築	146	2003.4.16	遺構・遺物 なし
18	本調査	三本柳 2 地割 36-1.3.4	宅地造成	2,226	2003.6.2 ～ 8.2	奈良時代の竪穴建物跡 13 棟、平安時代の竪穴建物跡 4 棟、奈良・平安時代の土坑 17 基、古代以降の溝跡 5 条、時期不明の土坑 3 基
19	本調査	三本柳 2 地割 39-57 外	擁壁設置	70	2004.4.13 ～ 4.15	時期不明の溝跡 2 条
20	本調査	三本柳 2 地割 49-50～66	下水道敷設・進入路設置	320	2006.7.31 ～ 8.11	奈良時代の竪穴建物跡 2 棟、竪穴跡 1 棟

次数	区分	所在地	調査原因	面積 (㎡)	調査期間	主な検出遺構
21	本調査	三本柳 2 地割 49-50 ~ 66	個人住宅改築	62	2007.4.16 ~ 4.27	奈良時代の竪穴建物跡 1 棟
22	試掘	三本柳 2 地割 16-35	個人住宅建築	77	2009.3.18	平安時代の竪穴建物跡 3 棟、土坑 1 基
23	本調査	三本柳 2 地割 16-35 外	個人住宅建築	80	2009.6.1 ~ 6.12	奈良時代の竪穴状遺構 1 基、時期不明の土坑 3 基
24	試掘	三本柳 2 地割 39-64	個人住宅建築	43	2009.10.7	遺構・遺物 なし
25	本調査	三本柳 2 地割 32-1 外	福祉施設建設	750	2010.5.6 ~ 5.31	奈良時代の竪穴建物跡 1 棟、平安時代の竪穴状遺構 1 基、時期不明の竪穴状遺構 1 基、土坑 1 基
26	試掘	三本柳 2 地割 33-2,3	宅地造成	367	2010.4.23	奈良時代の竪穴建物跡 4 棟
27	試掘	三本柳 2 地割 31-1 外	宅地造成	127	2012.6.15	遺構・遺物 なし
28	試掘	三本柳 2 地割 42-1 外	宅地造成	165	2013.5.9	遺構・遺物 なし
29	試掘	三本柳 2 地割 22-4 ~ 6	宅地造成	154	2014.4.30	遺構・遺物 なし
30	本調査	三本柳 2 地割 35-17	個人住宅建築	73	2016.4.27 ~ 5.24	奈良時代の竪穴建物跡 1 棟
31	試掘	三本柳 2 地割 26-3 の一部	宅地造成	240	2017.4.11	奈良・平安時代の竪穴建物跡 1 棟、古代以降の溝跡 1 条
32	本調査	三本柳 2 地割 33-2	宅地造成	1,624	2017.5.15 ~ 7.28	奈良時代の竪穴建物跡 6 棟、平安時代の竪穴建物跡 2 棟
33	試掘	三本柳 2 地割 37-2	長屋住宅建築	104	2017.10.11	遺構・遺物なし
34	試掘	三本柳 2 地割 29-2 外	個人住宅建築	20	2017.11.21	遺構なし
35	本調査 (今次)	三本柳 2 地割 28-1	宅地造成	3,032	2018.4.9 ~ 7.17	奈良時代の竪穴建物跡 5 棟、竪穴状遺構 1 基、古代以降の土坑 4 基、溝跡 2 条



第3図 西鹿渡遺跡 全体図

II 調査経過

1 調査に至る経緯

西鹿渡遺跡 第35次調査は、盛岡市三本柳第2地割地内において、宅地造成工事に伴って実施した記録保存を目的とした発掘調査（本調査）である。

調査対象地については、平成5年に地権者の吉田咲子氏から埋蔵文化財包蔵地の取扱いについて協議があり、包蔵地に該当することから、平成5年3月3日に発掘届が提出された。これを受けて盛岡市教育委員会（以下、「当委員会」という）では、平成5年8月18日～19日に試掘調査を実施した（第2次調査）。その結果、奈良・平安時代と想定される竪穴建物跡と溝跡等の遺構と土師器片が確認され、事業実施には本調査が必要である旨を回答した。その後、地権者側で調整が図られた結果、事業を実施することとなり、再度当委員会と協議した。協議により、事業対象区域約5,194㎡のうち、試掘調査で遺構が確認された範囲を中心とした約3,000㎡を発掘調査対象区域とし、緊急発掘調査を実施することになった。

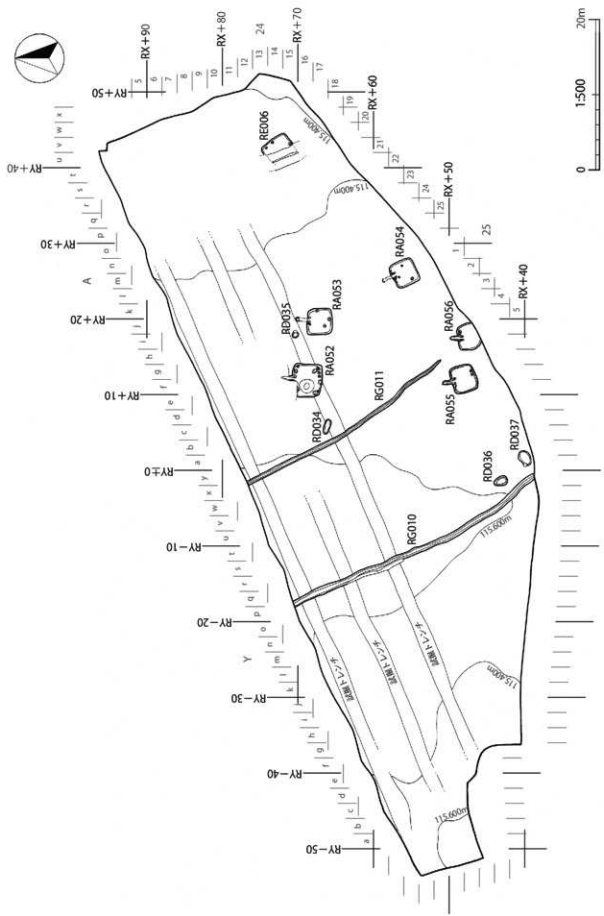
平成29年6月6日に発掘届が提出され、翌30年4月6日、当該事業主の株式会社アート不動産代表取締役社長 櫻井大介氏と発掘調査を受託された当委員会との間で、「埋蔵文化財に関する協定書」が締結された。これにより、発掘調査は当委員会が主体となり、調査に係る費用は事業主が負担することになった。調査は盛岡市遺跡の学び館が担当することになり、同年4月9日から開始した。

2 調査方法

本調査は、事業対象区域の中央部、試掘調査で遺構が確認された範囲を対象として実施した。調査面積は、3,032㎡である。

調査にあたり、本遺跡全域にグリッドを設定した。グリッドは日本測地系 平面直角座標X系のXY両軸に沿い、50mを単位とした大グリッドを設定した。さらに大グリッドは、2m四方の小グリッドで25×25に分割した。グリッド名は、南北軸を50mごとにアルファベット大文字、細分した2mごとにアルファベット小文字を、東西軸上を50mごとと、2mごとにアラビア数字を付して、A1a1、B2b2、C3c3、……、と呼称していった。

調査は、重機を使用した表土の除去から開始した。表土除去の結果、調査区域の中央帯を中心に、竪穴建物跡が確認され、その精査に着手した。調査は、建物跡の主軸及び直交方向に土層観察用の群（ベルト）を設定し、層の堆積状況を確認しながら進めた。建物跡内には、土層観察用ベルトを境に、方位を冠して、NW区、SE区、……、と呼称したエリアを設定し、そのエリア及び層ごとに遺物を取り上げた。遺構外から出土した土器は、グリッドごとに取り上げて収納した。特徴的な土器や床面から出土した土器は、出土状況の図化及び写真撮影を行って記録したうえで取り上げた。遺構は床面まで掘り下げた後に、土層の堆積状況を図化及び写真で記録し、完掘した。完掘後、平面図の図化及び完掘状況の写真を撮影した。全ての遺構の調査終了後、地形測量及び空中写真撮影を行い、本調査を終了した。

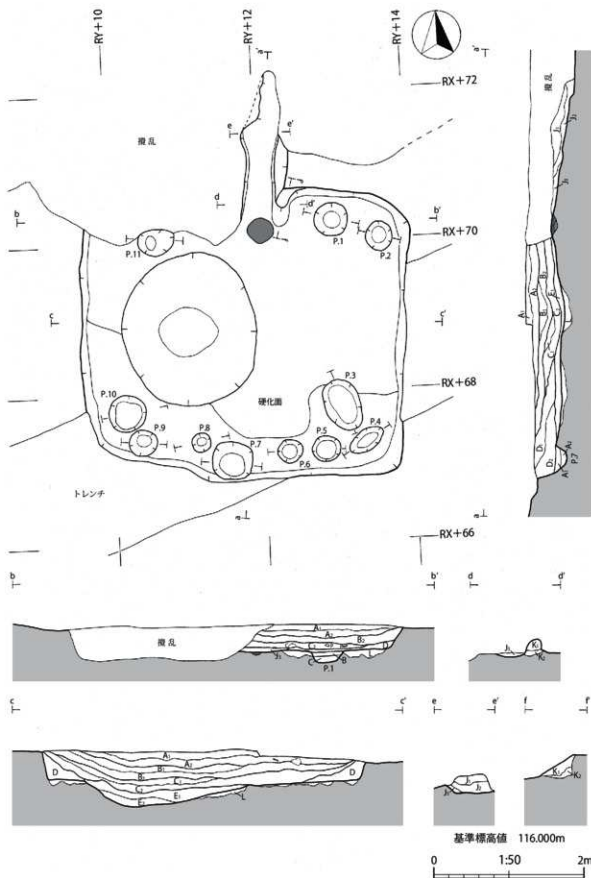


第4図 西鹿波道跡 第35次調査区全体図

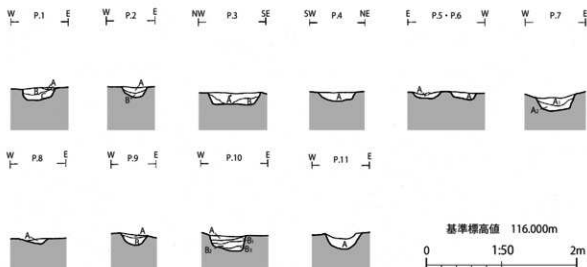
Ⅲ 遺構と遺物

RA 052 竪穴建物跡 (第5図・第6図・第7図)

位置	調査区中央部 (A24f15区)	平面形	不整隅丸方形	重複関係	なし
規模	南北 3.86m, 東西 4.34m	カマド方向	N-6°-E		
埋土	A～D層に大別され、D層以外はそれぞれ2層に細分される。 A層は、黒褐色土を主体とする層で、黄褐色シルト粒を少量含んでいる。A ₁ 層の方がシルト粒の含有率が高い。 B層は、黒褐色土を主体とする層で、黄褐色シルト粒を少量含んでいる。 C層は、暗褐色土を主体とする層で、上2層に比して若干明るい色調である。黄褐色シルト粒を少量含む。 D層は、黄褐色土を主体とする層で、暗褐色土粒を少量含む。上3層に比してやや軟質で、密度が疎い。				
壁の状態	北西部が攪乱により大半は湮滅しているが、遺存部分においては、外傾して直線的に立ち上がる。検出面からの深さは、約0.45mを測る。				
床の状態	北西部が攪乱により削平されているが、遺存部分はほぼ平坦で、南側を除き硬く締まった硬化面が広がっている。建物跡西側床面に、掃鉢状の土坑が掘り込まれていた。径約1.80m、最大深約0.33mを測る。土層の堆積状況から見れば、床下施設とは判断し難く、建物廃絶時、または埋没中に掘られた坑と推測される。 構築土 (L層) は、黄褐色シルトと黒褐色土の混合土である。				
カマド	北壁のほぼ中央で検出された。左袖及び煙道の一部は攪乱により削平されている。火床面は、平面が不整形円形を呈し、径約0.35m、熱浸透層厚約0.04mを測る。被熱の度合いは強く、中央部は硬く焼け締まっていた。 煙道は、煙出しに向かって緩やかに傾斜しており、残存部分で、長さ約1.95m、最大幅約0.52mを測る。カマド崩壊土 (J層) は暗褐色土を主体とする層で、いずれの層にも黄褐色シルト粒を含んでいるほか、焼土粒や炭化物も含まれていた。				
ピット	11口検出した。平面は、不整形円形または不整楕円形を呈する。規模は、P.1 - 径約0.44m、深さ約0.16m, P.2 - 径約0.38m、深さ約0.14m, P.3 - 径約0.48～0.70m、深さ約0.16m, P.4 - 径約0.28～0.52m、深さ約0.12m, P.5 - 径約0.38m、深さ約0.08m, P.6 - 径約0.34m、深さ約0.08m, P.7 - 径約0.52m、深さ約0.22m, P.8 - 径約0.26m、深さ約0.05m, P.9 - 径約0.36m、深さ約0.15m, P.10 - 径約0.50m、深さ約0.20m, P.11 - 径約0.32～0.50m、深さ約0.20mを測る。 埋土は2種類に分けられる。P.4・P.6・P.9・P.10・P.11は黒褐色土を主体とし、黄褐色シルト粒を少量含む土層である。それ以外のピットは、暗赤褐色を主体とする土層で、焼土粒と炭化物が混入していた。床面その他の状況から、本遺構が複数期にわたり使用された痕跡は認められなかったが、ピットの埋土が2種類に大別される点は、建物の建て替え等が行われ、複数期に使用された可能性も否定できない。				



第5図 RA 052 竪穴建物跡(1)



第6図 RA 052 竪穴建物跡(2)

出土遺物 (第8図・第9図) 土師器 環・甕・球胴甕が出土した。土器は、カマド右脇と建物跡南東隅のビット周辺から多く出土している。カマド右脇からは炭化物も確認されている。出土土器のうち、9はRA 053 竪穴建物跡床面出土土器と、13はRE 006 埋土内出土土器と接合している。

1～4は、土師器 環である。いずれも底部は丸底で、体部下半に段を有し、内面が黒色処理されている。内面はやや摩滅しており、2～4は外面も摩滅している。器面調整は、1・2はヘラナデで、3・4はヘラミガキが施されている。器内面はいずれもヘラミガキである。

5は、小型甕である。頸部に段を有し、口縁部が外反する器形を呈する。器面調整は、内外面ともにヘラナデである。6～10・13は、土師器 甕である。いずれも完形品ではないが、残存部位から想定すると、若干張り出した底部から内彎しながら体部が立ち上がり、頸部に段を有して、口縁部が外反する器形を呈すると推測される。器面調整は、内外面ともにヘラナデが施されている。11・12は、土師器 球胴甕である。体部は球形を呈し、頸部に段を有し、口縁部が大きく開いている。12は強い弧を描いて外反している。器内外面ともにヘラナデが施されている。

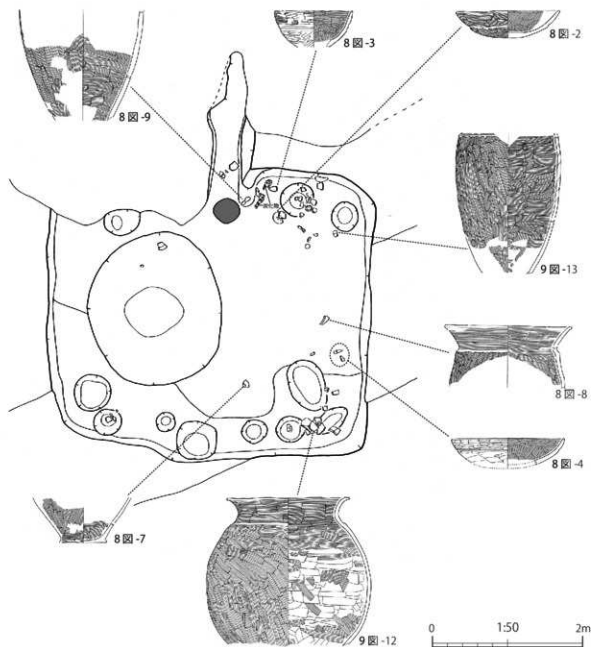
RA 053 竪穴建物跡 (第10図・第11図)

位置	調査区中央部 (A24j16区)	平面形	不整隅丸方形	重複関係	なし
規模	南北3.47m, 東西3.46m	カマド方向	N-1°-E		
埋土	A～D層に大別され、A・B層は2層に細分される。				

A層は、黒褐色土を主体とする層で、黄褐色シルト粒を少量含んでいる。シルト粒の含有率はA₂層の方が高く、シルト塊も点在していた。

B層は、黒褐色土を主体とする層で、黄褐色シルト粒を少量含んでいる。A層に比してやや軟質の土質である。

C層は、黄褐色土を主体とする層で、黒褐色土粒を少量含む。



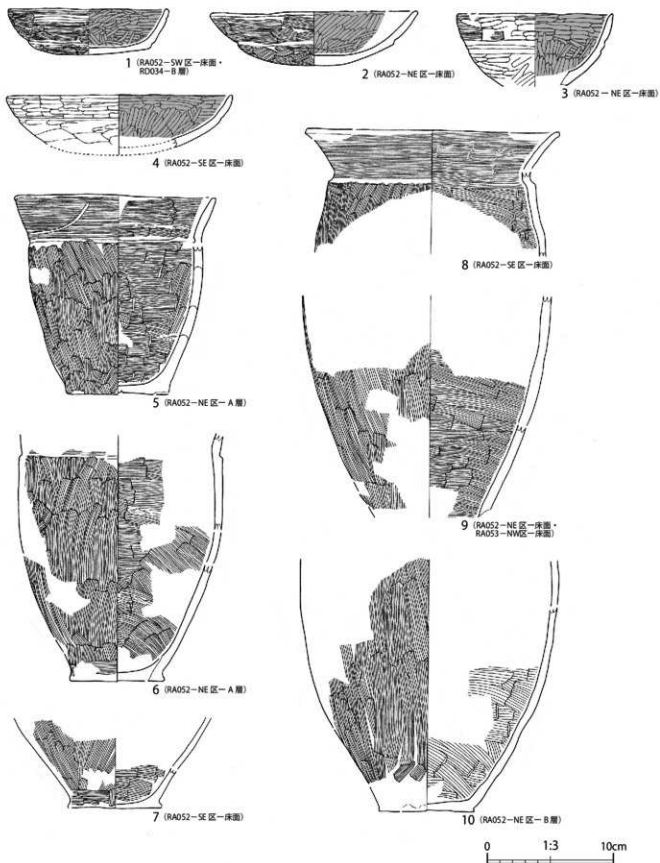
第7図 RA 052 竪穴建物跡 遺物出土状況

D層は、黒褐色土を主体とする層で、黄褐色シルト粒を微量含む。焼土粒と炭化物も少量含まれていた。

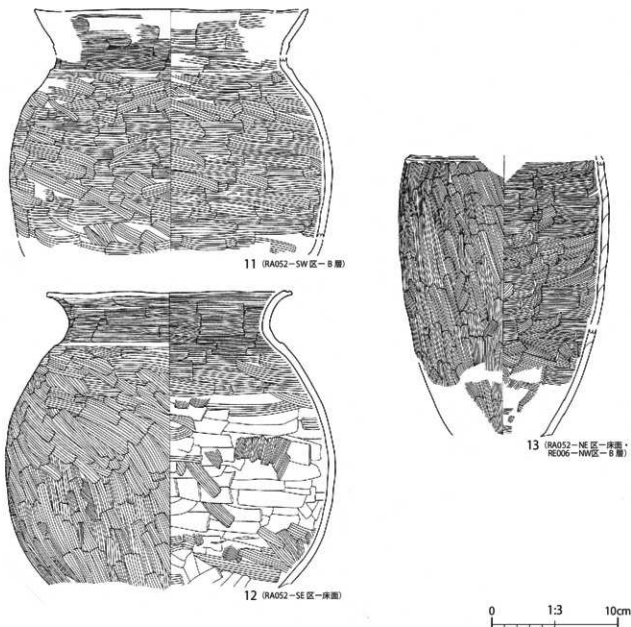
壁の状態 床面から直線的に立ち上がり、開口部付近は外反して立ち上がる。検出面からの深さは、約0.60mを測る。

床の状態 床面はほぼ平坦である。明確な硬化面は認められなかった。構築土(L層)は、黄褐色シルトと黒褐色土の混合土である。

カマド 北壁やや東寄りで検出された。火床面は、径約0.21mの不整形円形を呈し、熱浸透層は、厚さ約0.03mを測る。明るい赤褐色を呈し、焼き締まっていた。煙道は、削り貫き式であ



第8図 RA 052 竪穴建物跡 出土遺物(1)

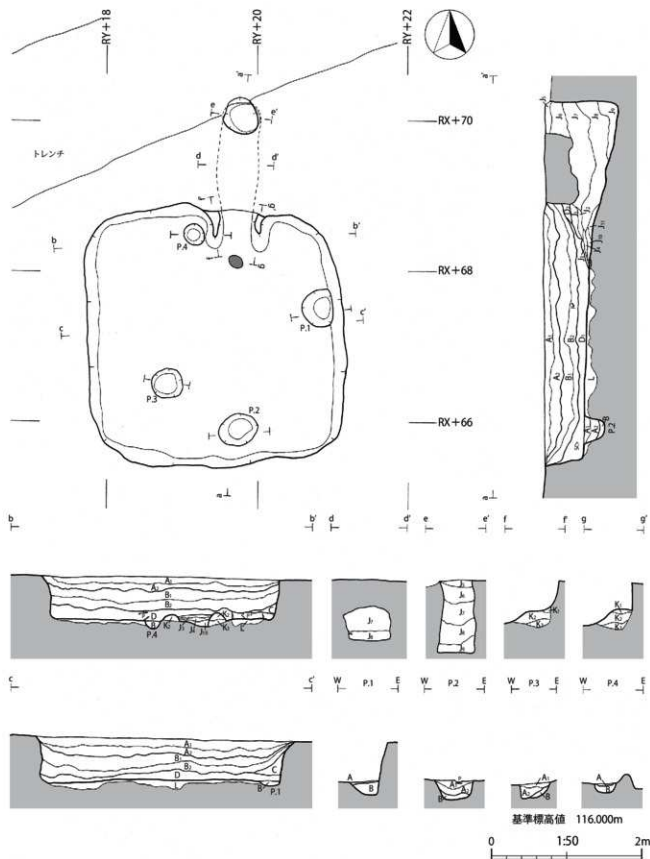


第9図 RA 052 竪穴建物跡 出土遺物(2)

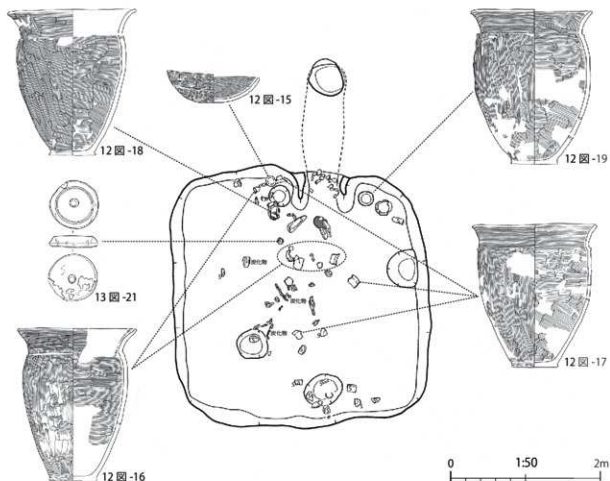
る。煙出しに向かって大きな勾配を呈しており、燃焼部と煙出し基底面との比高は約0.33cmを測る。煙道の規模は、長さ約1.52m、最大幅約0.71mを測る。

カマド崩壊土(J層)は、暗褐色土～褐色土を主体とする層である。燃焼部付近のJ₃・J₄・J₁₀・J₁₁層は焼土粒や焼土塊が混入していた。煙道天井部下のJ₇層には、天井崩落土と推測される黄褐色シルト塊が点在していた。下層では炭化物も混じっていた。カマド構築土(K層)は、黄褐色シルトを主体とし、暗褐色土粒が混入した層で形成されていた。

ビット 4口検出された。P.4はカマド西脇から検出されており、貯蔵穴の可能性はある。いずれも平面は不整形を呈し、規模は、P.1-径約0.40～0.48m、深さ約0.16m、P.2-径約0.42～0.52m、深さ約0.19m、P.3-径約0.40m、深さ約0.22m、P.4-径約0.28m、深



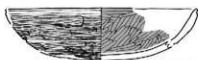
第10図 RA 053 竪穴建物跡



第11図 RA 053 竪穴建物跡 遺物出土状況

さ約0.12 mを測る。埋土はP.3を除き、上層が黒褐色土を主体とし、黄褐色シルト粒と焼土粒及び炭化物を微量含む層、下層が暗赤褐色土を主体とし、黄褐色シルト粒と焼土粒及び炭化物を微量含む層である。

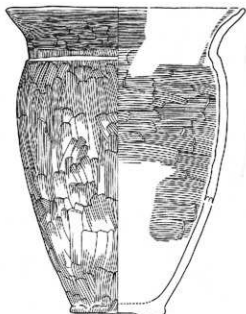
出土遺物（第12図・第13図） 土師器 環・甕、土製紡錘車、ガラス製小玉が出土した。建物跡ほぼ中央部からは、炭化物も多量に出土した。14・15は、土師器 環である。底部は丸底で、体部下半に段を有する。内面は黒色処理が施され、器面調整は、外面がヘラナデ、内面がヘラミガキである。16～19は、土師器 甕である。底部は若干張り出し、内罅しながら体部が立ち上がり、頸部に段を有し、口縁部は外反する器形を呈する。調整は内外面ともにヘラナデで、17・19は内外面とも磨滅している。17は、RA 052 竪穴建物跡及びRA 054 竪穴建物跡の床面出土土器と接合した。20は、小型甕である。外面がやや磨滅しているが、調整は、器外面が、底部及び体部がヘラミガキ、口縁部がヘラナデで、器内面はヘラナデが施されている。一部が欠損及び剥離している。断面は台形を呈し、法量は、径約6.2～7.8cm、幅約2.0cmを測る。22が、ガラス製小玉である。半分が欠損している。遺存部分で、最大長約0.3cm、最大幅0.6cmを測る。



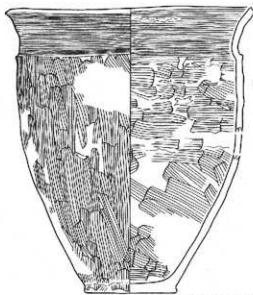
14 (RA053-NE区-B層)



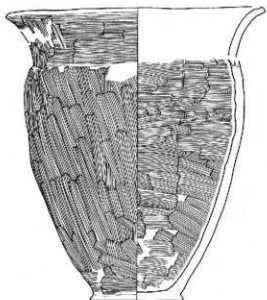
15 (RA053-NW区-床面)



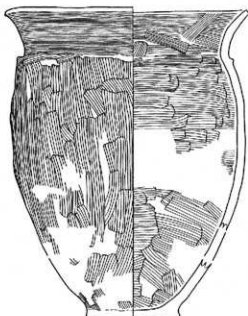
16 (RA053-NW区-床面)



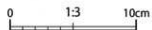
17 (RA053-NW・NE区-床面・
RA052-NE区-床面・
RA054-NW区-床面)



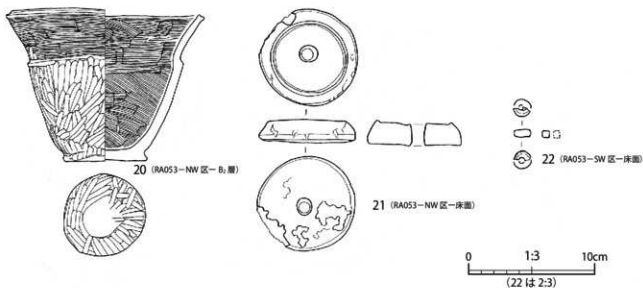
18 (RA053-NW区-床面)



19 (RA053-NE区-床面)



第12図 RA 053 竪穴建物跡 出土遺物(1)



第13図 RA 053 竪穴建物跡 出土遺物(2)

RA 054 竪穴建物跡 (第14図・第15図)

位置 調査区南部 (A24m22区) 平面形 不整隅丸方形 重複関係 なし
 規模 南北 3.25m, 東西 3.25m カマド方向 N-24°-W
 埋土 A～D層に大別される。B層及びC層はさらに2層に細分される。

A層は、黒褐色土を主体とする層で、黄褐色シルト粒を微量含んでいる。

B層は、暗褐色土を主体とする層で、黄褐色シルト粒を少量含んでいる。下層のB₂層の方が、色調が若干明るい。

C層は、黒褐色土を主体とする層で、黄褐色シルト粒を少量含んでいる。C₁層には、焼土粒と炭化物が微量含まれている。

D層は、黒褐色土を主体とする層で、黄褐色シルト粒を少量含む。

壁の状態 ほぼ直線的に外傾して立ち上がる。検出面からの深さは、約0.29mを測る。

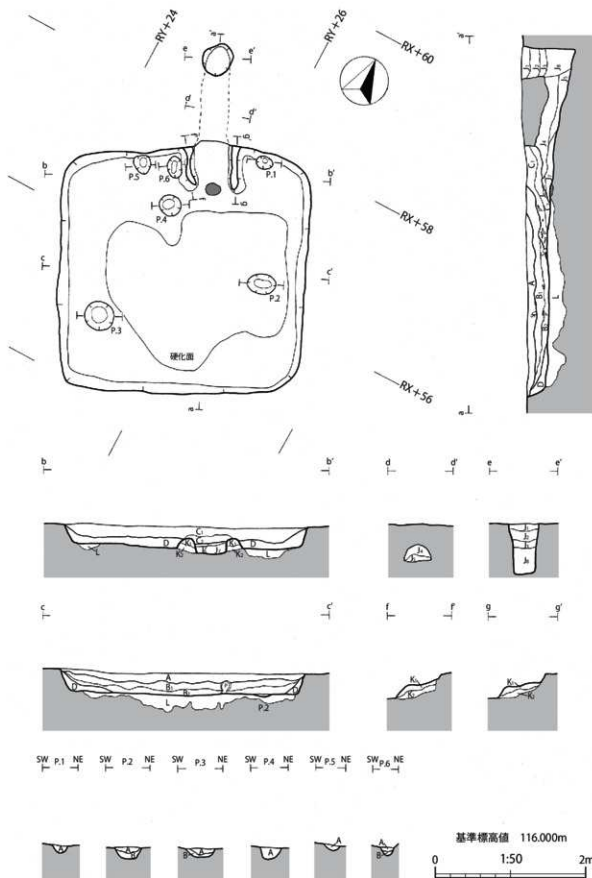
床の状態 ほぼ平坦である。床面中央部には、広く硬化面が認められた。

カマド 北西壁やや東寄りで検出された。火床面は、径約0.20mの不整形円で、熱浸透層の厚さは、約0.04mを測る。煙道は、削り貫き式で、燃焼部から煙出し基底面にかけて大きく勾配を呈している。長さ約1.32m, 最大幅約0.36mを測る。

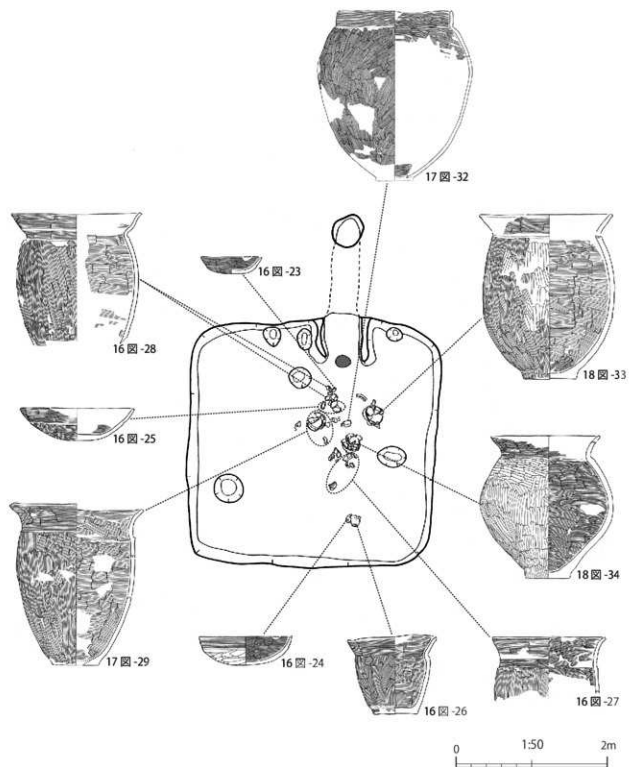
カマド崩壊土 (J層) は、暗褐色土を主体とする層で、黒褐色土粒と黄褐色シルト粒を少量含んでいる。燃焼部付近のJ₆・J₇層には、焼土粒及び炭化物が含まれていた。天井部下のJ₄・J₅層には、天井崩壊土の黄褐色シルト粒が多量に含まれていた。

カマド構築土 (K層) は、黄褐色シルトを主体とし、黒褐色土が含まれている。

ピット 6口検出した。平面は、不整形円形、または不整楕円形を呈し、規模は、P1 - 径約0.18～0.22m, 深さ約0.11m, P2 - 径約0.26～0.38m, 深さ約0.15m, P3 - 径約0.38m, 深さ約0.12m, P4 - 径約0.30m, 深さ約0.15m, P5 - 径約0.22～0.25m, 深さ約0.09m, P6 - 径約0.18～0.28m, 深さ約0.12mである。

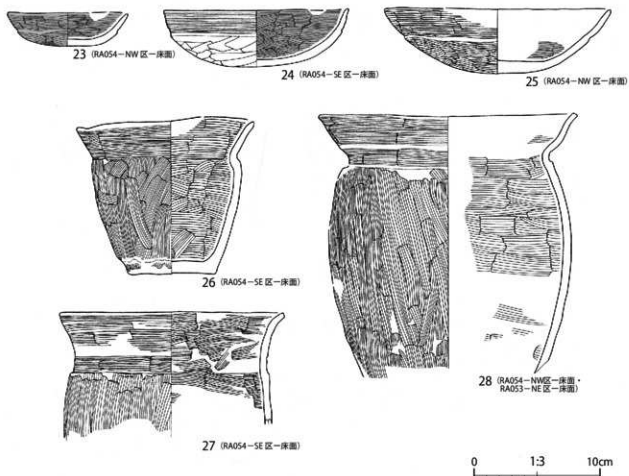


第14図 RA 054 竪穴建物跡

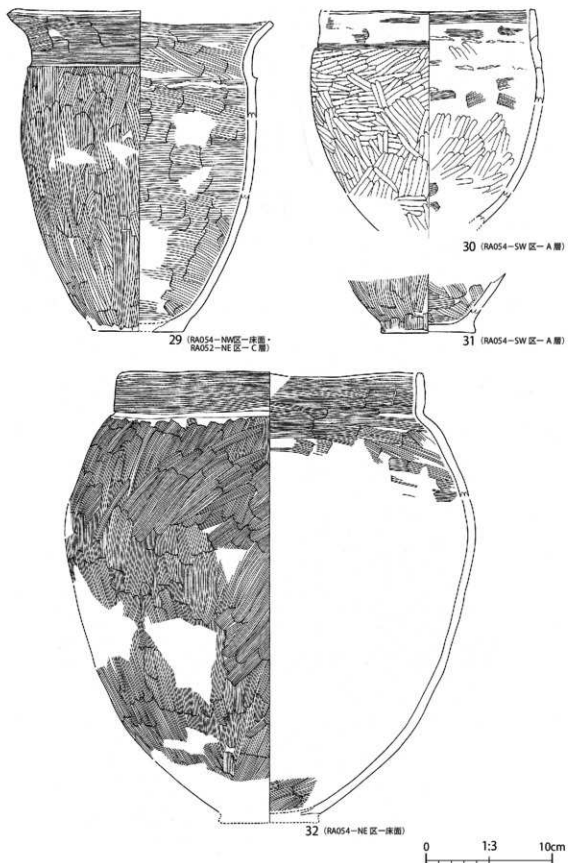


第15圖 RA 054 豎穴建物跡 遺物出土狀況

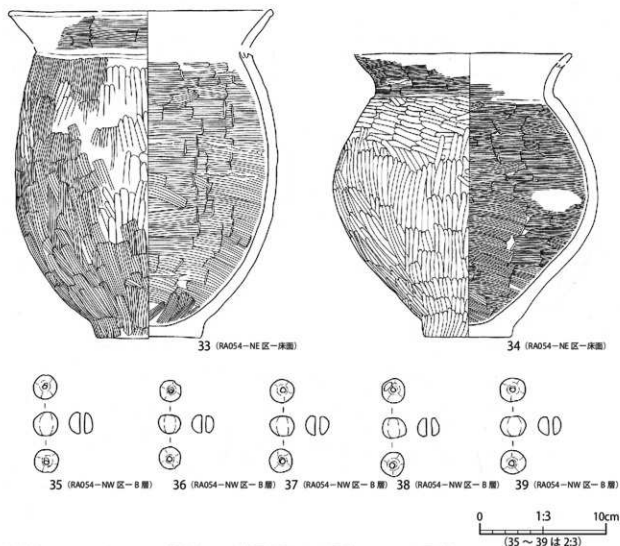
出土遺物 (第 16～18 図) 土師器 小型環・環・甕・小型甕・球胴甕, 土製小玉が出土した。大半が建物中央部から出土している。23 は, 土師器 小型環である。底部が丸底で, 体部下半に段を有する。器内外の両面が黒色処理されている。器面調整は, 内外面ともにヘラナデが施されている。24・25 は, 土師器 環である。ともに丸底で, 体部下半に段を有する。内面は黒色処理が施されている。器形は, 24 は底部から緩やかに立ち上がっているが, 25 は口縁部が大きく開いている。器面調整は, 24 が, 外面がヘラナデとヘラケズリ, 内面がヘラナデで, 25 が, 内外面ともにヘラナデである。26 は, 小型甕である。頸部に段を有し, 口縁部は大きく外傾している。器面調整は, 内外面ともにヘラナデが施されている。27～29 は, 土師器 甕である。いずれも頸部に段を有し, 口縁部が大きく外反している。器面調整は, 内外面ともにヘラナデである。32・34 は, 球胴甕である。32 は, 体部が球胴形を呈し, 頸部に段を有して, 口縁部が短く直立している。34 は, 体部中央が大きく張り出し, 頸部に段を有し, 口縁部が外反する器形を呈する。器面調整は, 32 は内外面ともにヘラナデで, 34 は, 器外面がヘラミガキ, 器内面がヘラナデが施されている。35～39 は, 土製小玉である。6 点出土したが, 1 点は破損していたため, 5 点を図示した。いずれも最大幅・最大長ともに 0.9～1.0cm ほどで, 中央に幅約 0.2cm の孔が穿たれている。



第 16 図 RA 054 竪穴建物跡 出土遺物 (1)



第17図 RA 054 竪穴建物跡 出土遺物(2)



第18図 RA 054 竪穴建物跡 出土遺物(3)

RA 055 竪穴建物跡 (第19図)

位置 調査区南部 (A25f1区) 平面形 不整隅丸方形 重複関係 なし
 規模 北西-南東 3.20m, 北東-南西 3.52m カマド方向 N-9°-W
 埋土 A~C層に大別され, C層は2層に細分される。

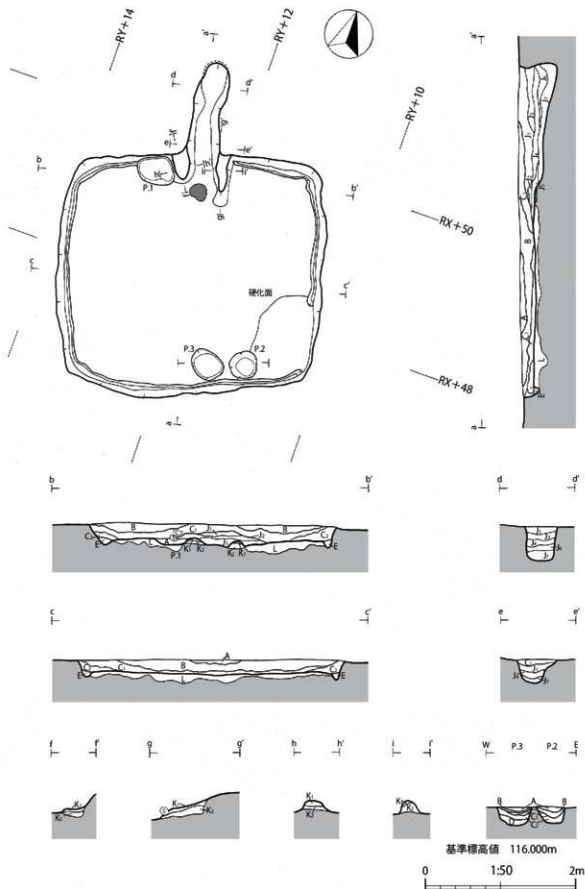
A層は, 黒褐色土を主体とする層で, 黄褐色シルト粒を微量含んでいる。

B層は, 黒褐色土を主体とする層で, 黄褐色シルト粒を少量含んでいる。シルト塊も点在していた。

C層は, 暗褐色土を主体とする層で, 黄褐色シルト粒を少量含んでいる。C₂層の方が黄褐色シルト粒の含有率が高い。

壁の状態 外傾して直線的に立ち上がる。検出面からの深さは, 約0.22mを測る。

床の状態 床面はほぼ平坦で, 建物跡北東隅部を除く全面に, 硬く締まった硬化面が広がっている。北東隅部を除き, 幅約0.04~0.10m, 深さ約0.05~0.08mの周溝が巡っている。



第19図 RA 055 竪穴建物跡

カマド 北壁中央で検出された。火床面は、径約 0.24m の不整形円形を呈し、熱浸透層厚約 0.02m を測る。部分的に強い被熱で焼け締まっていた。煙道は、掘り込み式であるが、基底面は南半部がほぼ平坦で、北半部は煙出し基底面に向かって勾配を呈している。規模は、長さ約 1.22m、最大幅約 0.42m を測る。

カマド崩壊土（J 層）は、上層は褐色土、下層は暗褐色土を主体とする層で、黄褐色シルト粒を少量含んでいた。火床面上層の J₂・J₁・J₃ 層には、焼土粒と炭化物も含まれていた。カマド構築土（K 層）は、黄褐色シルトを主体とし、暗褐色土粒が混入した土で形成されていた。

ピット 3 口検出した。カマド西袖脇で検出された P.1 は貯蔵穴と想定される。P.2・P.3 は、カマドの反対側壁に對で検出されており、柱穴以外の性格が想起される。平面は、不整形円形または不整形円形を呈し、規模は、P.1 一径約 0.40～0.48m、深さ約 0.13m、P.2 一径約 0.35m、深さ約 0.22m、P.3 一径約 0.35～0.45m、深さ約 0.25m を測る。

出土遺物（第 22 図） 土師器 甕が出土した。40 は体部のみで、器面調整は、内外面ともにヘラナデが施されている。

RA 056 竪穴建物跡（第 20 図・第 21 図）

位置 調査区南部（A25i1 区） **平面形** 不整形丸方形 **重複関係** なし

規模 南北 2.78m、東西 3.50m **カマド方向** N-O°-W

埋土 A～D 層に大別され、A 層は 2 層に、B 層は 3 層に細分される。

A 層は、黒褐色土を主体とする層で、黄褐色シルト粒を微量含んでいる。

B 層は、黒褐色土を主体とする層で、黄褐色シルト粒を少量含んでいる。さらに 3 層に細分され、上層の B₁ 層の方が黄褐色シルト粒の含有率が高く、シルト塊が点在している部分もある。

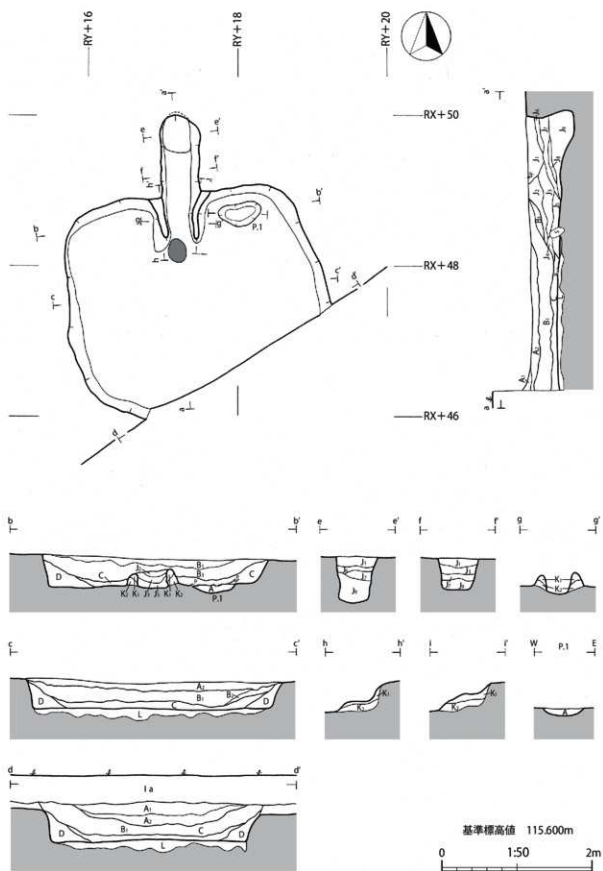
C 層は、暗褐色土を主体とする層で、黄褐色シルト粒を多量に含む。

D 層は、黒褐色土を主体とする層で、黄褐色シルト粒を多量に含んでいる。

壁の状態 外傾して直線的に立ち上がる。若干外反して立ち上がる壁も認められた。検出面からの深さは、約 0.50m を測る。

床の状態 南東隅部が調査区外に延びているため、全容は明確ではないが、検出部分においては、床面はほぼ平坦である。全体的によく締まっているが、明瞭な硬化面は認められなかった。構築土（L 層）は、黄褐色シルトと黒褐色土の混合土である。

カマド 北壁のほぼ中央で検出された。火床面は、不整形円形の平面を呈し、径約 0.25m、熱浸透層厚約 0.03m を測る。被熱の度合いは若干強めで、硬く焼き締まっていた。煙道基底面は、煙道部中頃まではほぼ平坦であるが、そこから煙出しに向かって強く勾配を呈する。煙道部の長さ約 1.09m、最大幅約 0.54m を測る。カマド崩壊土（J 層）は、上層が黒褐色土、下層が暗褐色土を主体とする。燃焼部付近の J₃ 層は焼土粒及び塊が多量に混じっていた。J₂・J₁ 層には、焼土粒が含まれているほか、煙道天井の崩壊土と考えられる黄褐色シルト塊も認められた。

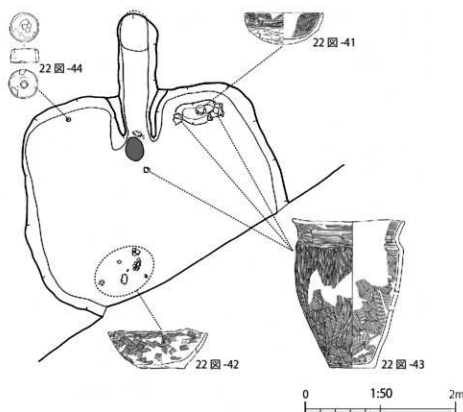


第20図 RA 056 竪穴建物跡

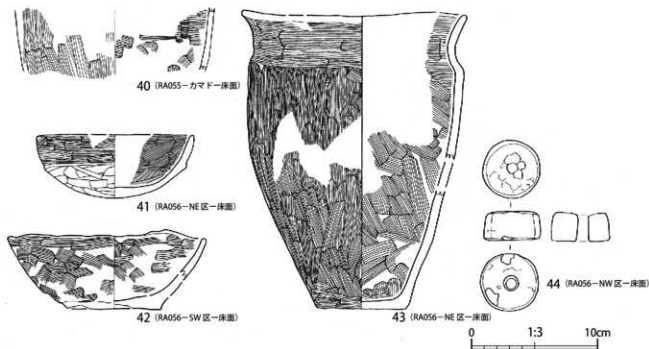
ピット カマド右脇で検出した。貯蔵穴と想定される。平面は不整楕円形を呈し、基底面は凸レンズ状に彎曲している。規模は、長軸約0.57 m、短軸約0.31 m、深さ約0.09 mを測る。埋土は単層で、黒褐色土を主体とし、黄褐色シルト粒を少量、焼土粒を微量含んでいる。

出土遺物 (第22図) 土師器 坏・大型坏・甕が出土した。土製紡錘車も出土している。大型坏 (42) は、建物跡南西隅付近からまとまって出土しており、それ以外は、カマド両脇を主体に出土している。

41 は、土師器 坏である。体部下半に段を有し、口縁部は直立気味に立ち上がっている。内面は黒色処理が施されている。器面調整は、器外面は、口縁部から体部上半にかけてヘラナデが、体部下半はヘラケズリが施されている。器内面は、ヘラナデが施され、底部にかけてヘラミガキが認められる。42 は、土師器 大型坏である。底部から僅かに内彎しながら立ち上がる器形を呈しているが、全体的に歪みが認められる。内外面ともに磨滅している。調整は、器内外面ともにヘラナデである。43 は、土師器 甕である。底部から内彎しながら体部が立ち上がり、頸部の括れを経て口縁部が外反している。器面調整は、内外面ともにヘラナデである。44 は、土製紡錘車である。断面は方形に近い台形を呈し、中央に孔が穿たれている。径約4.4cm、幅約2.4cmを測る。



第21図 RA 056 竪穴建物跡 遺物出土状況



第 22 図 RA 055・056 竪穴建物跡 出土遺物

RE 006 竪穴状遺構 (第 23 図)

位置 調査区東部 (A24u13 区) 平面形 不整隅丸方形 重複関係 なし
 規模 北西-南東 3.82m, 北東-南西 3.14m 主軸方向 N-40° E
 埋土 A~C 層に大別され, A 層及び B 層は 2 層に細分される。

A 層は, 黒褐色土を主体とする層で, 黄褐色シルト粒を少量含んでいる。下層の A₂ 層の方が黄褐色シルト粒の含有率が高い。

B 層は, 暗褐色土を主体とする層で, 黄褐色シルト粒を少量含んでいる。B₁ 層と B₂ 層とでは, 黄褐色シルト粒の含有率に大差はないが, B₂ 層の方が色調は若干明るい。

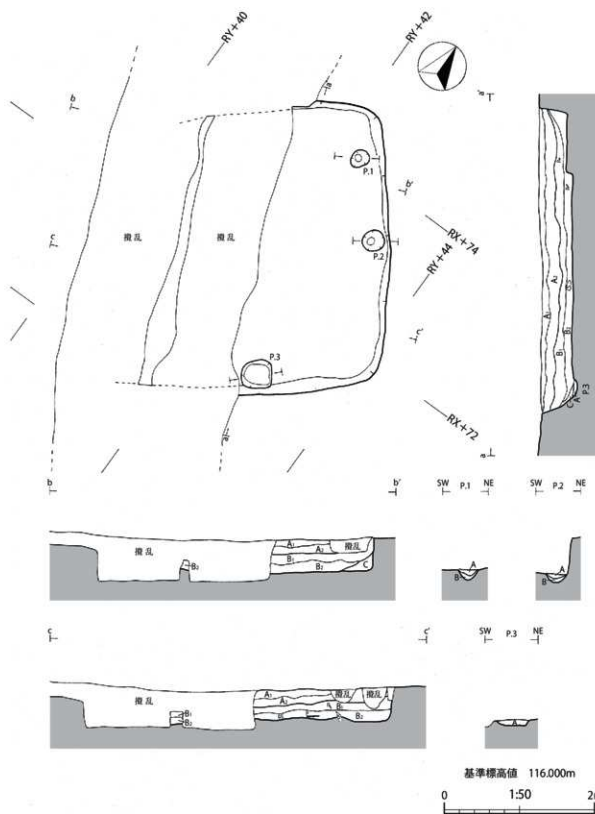
C 層は, 褐色土を主体とする層で, 黄褐色シルト粒を少量含んでいる。

壁の状態 攪乱により, 西半部が大きく毀損しており, 東半部が遺存しているのみである。遺存分においては, ほぼ直線的に外傾して立ち上がる。検出面からの深さは, 約 0.43m を測る。

底の状態 北東隅付近が若干高くなっているが, それ以外はほぼ平坦である。

ピット 東壁際と南壁際から合計 3 口が確認された。いずれも不整円形を呈し, 規模は, P.1 - 径約 0.22~0.25m, 深さ約 0.14m, P.2 - 径約 0.29m, 深さ約 0.12m, P.3 - 径約 0.37~0.40m, 深さ約 0.06m を測る。埋土は, P.1 及び P.2 は 2 層から成り, 上層は黒褐色土を主体とし, 下層は黄褐色土を主体としている。P.3 は単層で, 黒褐色土を主体としている。

出土遺物 (第 26 図) 土師器 甕・球胴甕, 土製小玉が出土した。45・46 は, 土師器 甕である。底部が僅かに張り出し, 体部に至っている。器面調整は, 内外面ともにヘラナデである。48 は, 土師器 球胴甕である。口縁部と底部の一部を欠いている。頸に僅かに段が認められる。調整は, ヘラナデとヘラミガキである。47 は, 土製小玉である。長さ・幅約 1.1cm を測る。



第 23 図 RE 006 豎穴状遺構

RD 034 土坑 (第 24 図)

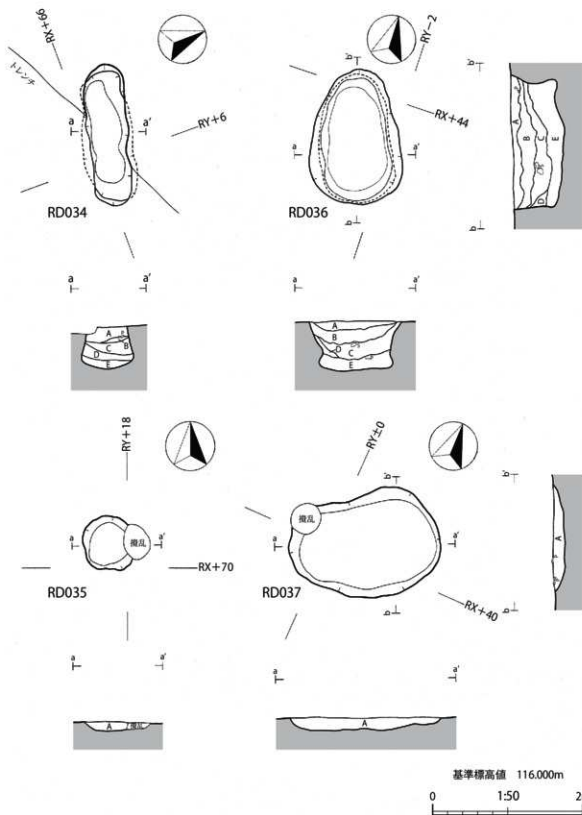
位 置	調査区中央部 (A24c17 区)	平 面 形	不整長楕円形	重複関係	なし
規 模	南北 0.67m, 東西 1.87m				
埋 土	A～E 層の 5 層からなる。 A 層は、黒褐色土を主体とする層で、黄褐色シルト粒を微量含んでいる。 B 層は、黒褐色土を主体とする層で、黄褐色シルト粒を少量、焼土粒及び炭化物を微量含んでいる。 C 層は、黒褐色土を主体とする層で、黄褐色シルト粒を少量含んでいる。 D 層は、黄褐色土を主体とする層で、黒褐色土粒を多量に含んでいる。 E 層は、黒褐色土を主体とする層で、黄褐色シルト粒を少量含んでいる。				
底面・壁	壁は、開口部から基底面に向かって広がるフラスコ状を呈する。基底面は凸レンズ状に彎曲している。				
出土遺物	B 層から土師器 坏片が出土しており、R A 052 竪穴建物跡床面出土土器と接合した (第 8 図-1)。また、小破片のため図示しなかったが、土師器 甕片も出土している。				

RD 035 土坑 (第 24 図)

位 置	調査区中央部 (A24i15 区)	平 面 形	不整形	重複関係	なし
規 模	南北 0.69m, 東西 0.54m				
埋 土	若干赤味を帯びた黒褐色土を主体とし、黄褐色シルト粒を微量含んでいる。焼土粒及び炭化物も若干含まれていた。				
底面・壁	基底面はほぼ平坦で、壁は大きく外傾して立ち上がる。検出面からの深さ約 0.13m を測るが、後世の耕作等により開口部は大きく削平されていた。				
出土遺物	なし				

RD 036 土坑 (第 24 図)

位 置	調査区南部 (Y25y4 区)	平 面 形	不整楕円方形	重複関係	なし
規 模	北西-南東 1.78m, 北東-南西 1.22m				
埋 土	A～E 層の 5 層からなる。 A 層は、黒褐色土を主体とする層で、黄褐色シルト粒を少量含んでいる。 B 層は、黒褐色土を主体とする層で、黄褐色シルト粒を微量含んでいる。焼土粒及び炭化物も微量含まれていた。粒子が粗く、砂質土に近い土質である。 C 層は、暗褐色土を主体とする層で、黄褐色シルト粒を多量に含んでいる。 D 層は、黄褐色土を主体とする層で、黒褐色土粒を少量含んでいる。 E 層は、暗褐色土を主体とする層で、黄褐色シルト粒を少量含む。焼土粒及び炭化物も微量含んでいる。粒子が粗く、砂質土に近い土質である。				
底面・壁	壁は、中端が括れる「J」字状を呈する。基底面は平坦ではなく、彎曲している。				
出土遺物	埋土内から土師器 甕が出土し、R E 006 竪穴状遺構出土土器と接合した (第 26 図-46・48)。				



第 24 図 RD 034 ~ 037 土坑

RD 037 土坑 (第 24 図)

位 置	調査区南部 (A25a5 区)	平面形	不整楕円形	重複関係	なし
規 模	北東-南西 2.02m, 北西-南東 1.41m				
埋 土	黒褐色土を主体とし, 黄褐色シルト粒を少量含んでいた。				
底面・壁	基底面から緩やかに彎曲して壁が立ち上がる。後世の耕作等により開口部は削平されていたと推測される。				

出土遺物 (第 26 図) 土師器 環が出土した。49 は, 体部下半に段を有し, 口縁部が開く器形を呈している。器内面は黒色処理が施されている。器面調整は, 器外面がヘラナデ, 器内面がヘラミガキである。図示しなかったが, 土師器 甕も出土している。

RG 010 溝跡 (第 25 図)

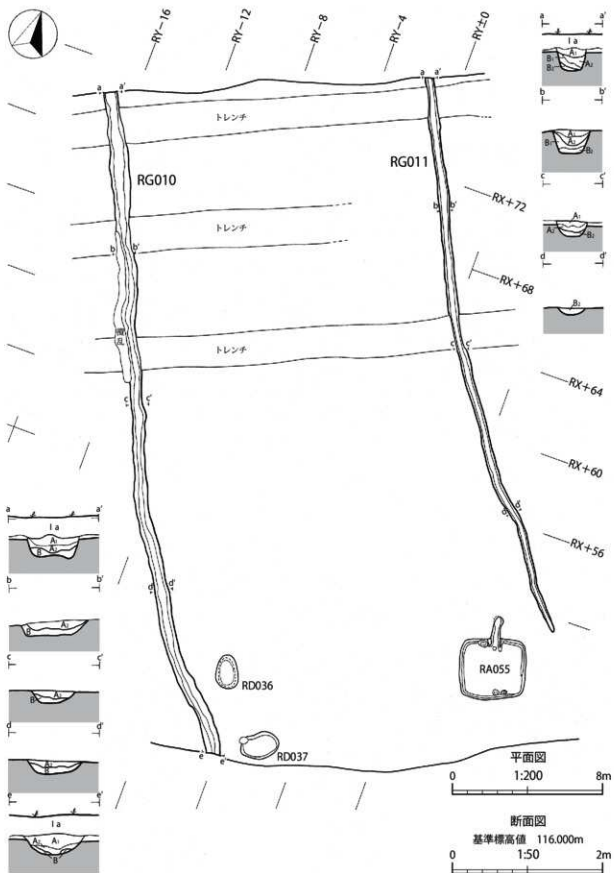
位 置	調査区中央部 (Y24q15 区-Y25y6 区)	重複関係	なし
規 模	延長 29.5m, 最大幅 0.74m		
埋 土	A・B 層の 2 層からなる。		
	A 層は, 黒褐色土を主体とし, 黄褐色シルト粒を少量含んでいる。シルト粒の含有率により 2 層に細分される。		
	B 層は, 暗褐色土を主体とし, 黄褐色シルト粒を多量に含んでいる。		

底面・壁 基底面はほぼ平坦で, 壁は外傾して立ち上がる。検出面からの最大深約 0.24m を測る。
 出土遺物 (第 26 図) 土師器 甕, 土製勾玉が出土した。50 は, 土師器 甕である。底部が若干張り出し, 体部が外傾する器形を呈する。器面調整は, 内外面ともにヘラナデである。51 は, 土製勾玉である。「C」字形を呈し, 径約 0.2cm の孔が穿たれている。色調は明るめの赤褐色である。最大長約 3.4cm, 最大幅約 2.2cm を測る。

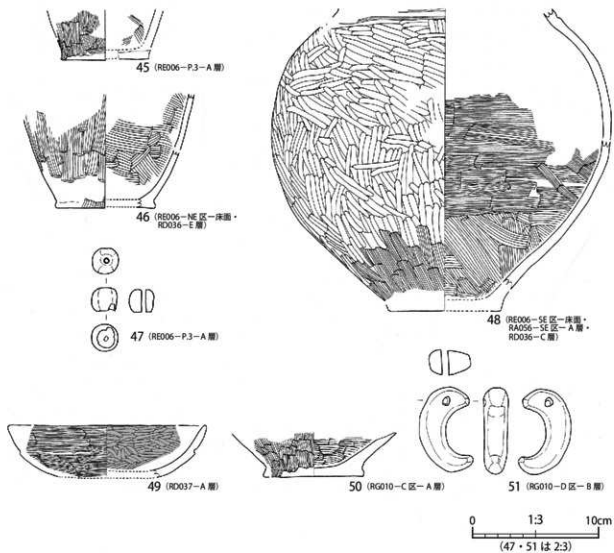
RG 011 溝跡 (第 25 図)

位 置	調査区中央部 (Y24y12 区-A24h25 区)	重複関係	なし
規 模	延長 25.2m, 最大幅 0.40m		
埋 土	A・B 層の 2 層からなり, 各々 2 層に細分される。		
	A 層は, 黒褐色土を主体とし, 黄褐色シルト粒を少量含んでいる。A ₂ 層の方が黄褐色シルト粒の含有率が高い。		
	B 層は, 暗褐色土を主体とし, 黄褐色シルト粒を少量に含んでいる。下層の B ₂ 層の方が, 色調が明るめで, 黄褐色シルト粒が多く含まれている。		

底面・壁 基底面はほぼ平坦で, 壁は外傾して立ち上がる。検出面からの最大深約 0.28 m を測る。
 出土遺物 土師器 環・甕が出土したが, 小破片のため図示しなかった。



第25図 RG 010・011 溝跡



第26図 竪穴状遺構・土坑・溝跡 出土遺物

IV まとめ

本調査の結果、竪穴建物跡5棟、竪穴状遺構1基、土坑4基、溝跡2条が確認された。竪穴状遺構は、カマド等の付属施設が確認されなかったため、竪穴建物跡とは認定しなかったが、建物跡である蓋然性は高い。検出された遺構のうち、竪穴建物跡及び竪穴状遺構は、出土した土器の様相から、8世紀中葉から後葉に帰属すると考えられる。また、土坑及び溝跡も当該期またはそれ以降の時期が想定される。本章では、竪穴建物跡を中心に本調査を概括する。

今次調査の竪穴建物跡は、辺長3.8×4.3mのRA052竪穴建物跡を最大に、一辺3～4mの範疇に収まる。これを過去の調査例にあわせて規模の分布をみると、一辺約5m以上・床面積25㎡以上の大型住居、一辺4～5m・床面積14～25㎡の中型住居、一辺約4m未満・床面積14㎡以下の小型住居に類型化される(第27図)。今次調査例では、RA052竪穴建物跡が中型住居、それ以外の4棟が小型住居に相当する。

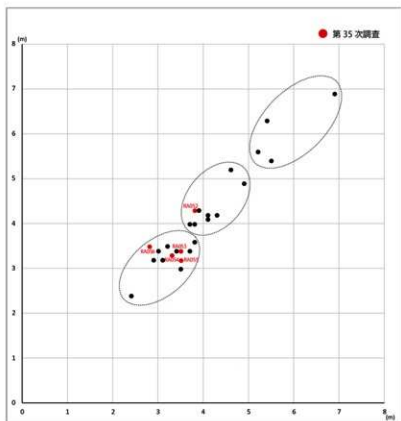
竪穴建物跡のうち、特徴的な一つが、RA052竪穴建物跡である。床面のほぼ中央部に挿鉢状の土坑を有するもので、本遺跡においても数例散見される。また、同時期の高檜A遺跡においても類例が求められる。前述の通り、埋土の堆積状況から床面施設とは想定し難く、建物廃絶時、または埋没初期段階で構築されたと推測される。しかし、資料に乏しく、その性格は明確にはし得ない。また、ピットの埋土が、黒褐色土主体と、暗赤褐色主体の2種が存在するのも特徴の一つである。建て替え等の痕跡は認められなかったが、建物焼失前と後の2時期に使用された可能性も想定されるものである。

今次調査の今一つの特徴が、異なる遺構から出土した土器が接合する「遺構間接合」が複数確認されたことである。例えば、RA052竪穴建物跡、RA053竪穴建物跡及びRA054竪穴建物跡の床面出土土器が接合し、1個体をなしている。このような例が復元個体数にして8個体確認されている(第29図)。これらの事象は、当該遺構が同時期に帰属することを示唆するものであるが、同時に、遺構(竪穴建物跡)同士に何かしらの関連性が存在する可能性も挙げられる。

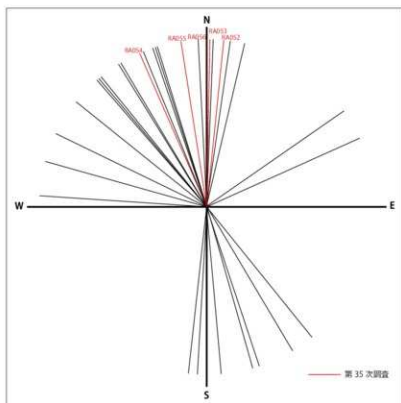
本遺跡の調査は、個人住宅建築等に係る小規模面積の発掘調査や試掘調査が大勢を占めており、遺跡の様相については、明確にし得ない部分も多い。特に、遺跡西側部分は類例に乏しく、様相が判然としない。集落の形成範囲や展開の様相、隣接する遺跡との関係性等、解明が待たれる課題は多いが、さらなる知見の増加を待って、後考を期すこととしたい。

【参考文献】

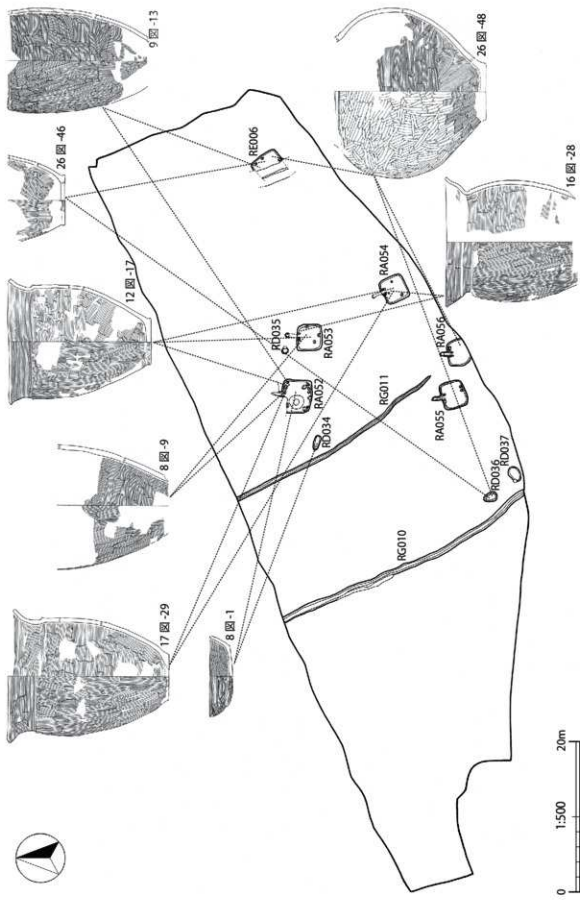
- 盛岡市教育委員会 2008 『盛岡市内遺跡群—平成18・19年度発掘調査報告』
- 盛岡市教育委員会 2009 『高檜A遺跡—「パークスクエア都南中央」宅地造成に伴う緊急発掘調査報告書—』
- 盛岡市教育委員会 2018 『西鹿渡遺跡—「M Stage 三本柳」宅地造成に伴う緊急発掘調査報告書—』



第 27 図 西鹿波遺跡 住居規模散布図



第 28 図 西鹿波遺跡 竪穴建物跡 カマド方位分布図



第 29 圖 遺構間接合状況図

附 章

西鹿渡遺跡第 35 次調査出土炭化物の 放射性炭素年代 (AMS 測定)

(株) 加速器分析研究所

1 測定対象試料

西鹿渡遺跡は、岩手県盛岡市三本柳第 2 地割 28-1 に所在し、低位段丘端部に立地する。測定対象試料は、炭化材 4 点である (表 1)。なお、これら同一試料を対象に樹種同定も実施されている (別稿樹種同定報告参照)。

2 測定の意義

竪穴建物跡の年代を確認する。

3 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、土等の付着物を取り除く。
- (2) 酸-アルカリ-酸 (AAA: Acid Alkali Acid) 処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA 処理における酸処理では、通常 1 mol/l (1M) の塩酸 (HCl) を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム (NaOH) 水溶液を用い、0.001M から 1M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が 1M に達した時には「AAA」、1M 未満の場合は「AaA」と表 1 に記載する。
- (3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素 (CO₂) を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト (C) を生成させる。
- (6) グラファイトを内径 1mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

4 測定方法

加速器をベースとした ¹⁴C-AMS 専用装置 (NEC 社製) を使用し、¹⁴C の計数、¹³C 濃度 (¹³C/¹²C)、¹⁴C 濃度 (¹⁴C/¹²C) の測定を行う。測定では、米国立標準局 (NIST) から提供されたシュウ酸 (HO₂C) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5 算出方法

- (1) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の ¹³C 濃度 (¹³C/¹²C) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (‰) で表した値である (表 1)。AMS 装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2) ¹⁴C 年代 (Libby Age: yrBP) は、過去の大気中 ¹⁴C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950 年を基準年 (OyrBP) として遡る年代である。年代値の算出には、Libby の半減期 (5568 年) を使用する (Stuiver and Polach 1977)。¹⁴C 年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表 1 に、補正していない値を参考値として表 2 に示した。¹⁴C 年代と誤差は、下 1 桁を丸めて 10 年単位で表示される。また、¹⁴C 年代の誤差 ($\pm 1\sigma$) は、試料の ¹⁴C 年代が

その誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

- (3) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の¹⁴C濃度の割合である。pMCが小さい(¹⁴Cが少ない)ほど古い年代を示し、pMCが100以上(¹⁴Cの量が標準現代炭素と同等以上)の場合Modernとする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。
- (4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の¹⁴C濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の¹⁴C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、¹⁴C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差($1\sigma = 68.2\%$)あるいは2標準偏差($2\sigma = 95.4\%$)で表示される。グラフの縦軸が¹⁴C年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない¹⁴C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13データベース(Reimer et al. 2013)を用い、OxCalv4.3較正プログラム(Bronk Ramsey 2009)を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2に示した。暦年較正年代は、¹⁴C年代に基づいて較正(calibrate)された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」または「cal BP」という単位で表される。

6 測定結果

測定結果を表1, 2に示す。

試料の¹⁴C年代は、1320±20yrBP(試料3, 4)から1270±20yrBP(試料1)の間にまとまっている。暦年較正年代(1 σ)は、最も古い試料3, 4が659~760cal ADの間に2つの範囲(2つある範囲の新しい方が若干異なる)、最も新しい試料1が689~767cal ADの間に2つの範囲で示される。いずれも7世紀から8世紀のまとまった年代となっている。

試料の炭素含有率はすべて70%前後の適正な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

文献

- Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51(1), 337-360
- Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 55(4), 1869-1887
- Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of ¹⁴C data, *Radiocarbon* 19(3), 355-363

表1 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 補正值)

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-181493	1	遺構: RA052 竪穴建物跡 C層	炭化材	AAA	-25.81 ± 0.42	1,270 ± 20	85.36 ± 0.24
IAAA-181494	2	遺構: RA052 竪穴建物跡 C層	炭化材	AAA	-24.57 ± 0.38	1,280 ± 20	85.26 ± 0.23
IAAA-181495	3	遺構: RA053 竪穴建物跡 床面	炭化材	AAA	-26.06 ± 0.42	1,320 ± 20	84.84 ± 0.24
IAAA-181496	4	遺構: RA053 竪穴建物跡 床面	炭化材	AaA	-26.05 ± 0.35	1,320 ± 20	84.82 ± 0.25

[IAA登録番号: #9313]

表2 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 未補正值, 暦年較正用 ^{14}C 年代, 較正年代)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-181493	1,290 \pm 20	85.21 \pm 0.23	1,271 \pm 22	689calAD - 722calAD (39.5%) 740calAD - 767calAD (28.7%)	677calAD - 771calAD (95.4%)
IAAA-181494	1,270 \pm 20	85.34 \pm 0.22	1,280 \pm 22	685calAD - 716calAD (38.8%) 743calAD - 766calAD (29.4%)	672calAD - 770calAD (95.4%)
IAAA-181495	1,340 \pm 20	84.65 \pm 0.23	1,321 \pm 22	659calAD - 690calAD (60.3%) 752calAD - 760calAD (7.9%)	655calAD - 715calAD (78.3%) 743calAD - 766calAD (17.1%)
IAAA-181496	1,340 \pm 20	84.64 \pm 0.24	1,322 \pm 23	659calAD - 690calAD (59.6%) 751calAD - 760calAD (8.6%)	655calAD - 715calAD (78.5%) 744calAD - 765calAD (16.9%)

[参考値]

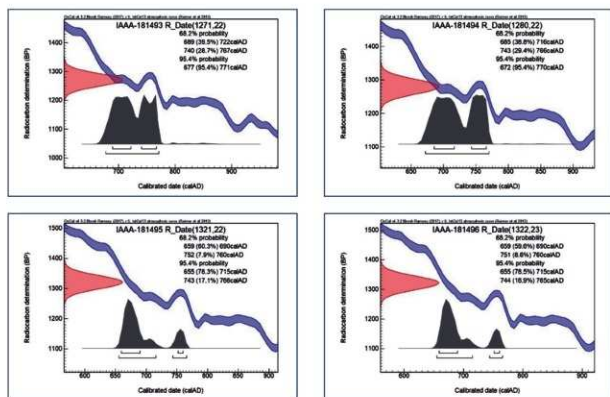


図1 暦年較正年代グラフ (参考)

西鹿渡遺跡第35次調査出土炭化材の樹種同定

1 試料

西鹿渡遺跡は、岩手県盛岡市三本柳第2地割28-1に所在し、低位段丘端部に立地する。本遺跡の竪穴建物跡の床面等から炭化材が出土し4試料の炭化材の樹種同定を行った。(表1)。

なお、同一試料の放射性炭素年代測定が実施され、7～8世紀頃の年代値が示されている(別稿年代測定報告参照)。

2 分析方法

炭化材はステンレス剃刀で横断面、放射断面、接線断面を割り出しプレパラートに固定して反射光式顕微鏡で観察し、現生標本の形態に基づき同定を行った。

3 結果

同定結果を表1に示す。本遺跡の炭化材は4試料のうち3点がクワ属、1点はカエデ属と同定された。以下に同定の根拠を示す。

・クワ属 (*Morus*)

年輪はじめに大きい道管が数列配列し、徐々に径を減じながら数個が塊状に複合して斜めに並びながら散在する環孔材。道管は単穿孔、放射組織は1～7列で平伏と直立細胞が混在し異性である。

・カエデ属 (*Acer*)

中程度の道管が年輪内に平等に分布する散孔材で、年輪初めの道管はやや大きい。道管は単穿孔で、内壁に密にらせん肥厚がある。木繊維の壁厚の違いで横断面上にカエデ属特有の波のような模様が見れる。放射組織は1～5列で、平伏細胞のみの同性である。

表1 西鹿渡遺跡出土炭化材の樹種

番号	遺構	層位	樹種
1	RA052	C層	クワ属
2	RA052	C層	クワ属
3	RA053	床面	クワ属
4	RA053	床面	カエデ属

4 考察

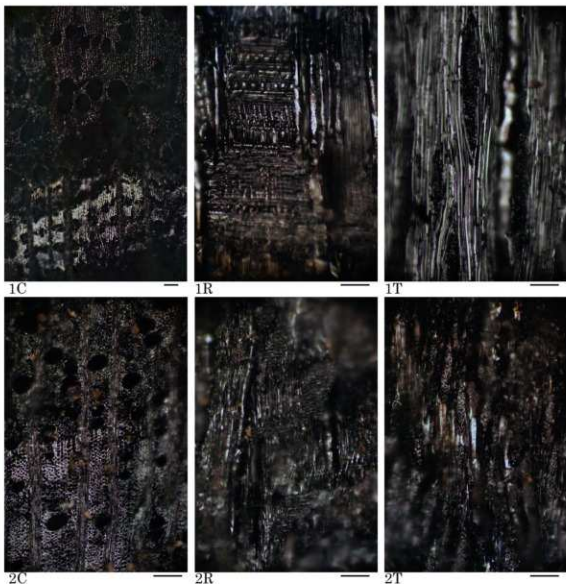
本遺跡で出土したクワ属とカエデ属は、両者とも丘陵や山地に生育する落葉高木で、二次林などに多く生育している種類である。建築材のほか器具にも使われ燃料材としても利用される(鳥地ほか1982)。

本遺跡では、住居跡の床面等から検出されたことから住居構築材もしくは燃料材の可能性があるが、焼失住居であれば住居内の器具などに使われていた木材である可能性もある。

岩手県内の古墳時代から平安時代の住居内炭化材は、全体としてはクリやケヤキが多い傾向にあるが、広葉樹を中心に様々な樹種が確認されている（伊東ほか 2012）。

文献

伊東隆夫・山田昌久，2012．木の考古学 出土木製品用材データベース，海青社。
島地謙・伊東隆夫，1982．図説 木材組織，地球社。



図版 1 西鹿遺跡出土炭化材の顕微鏡写真

1. クワ属（試料 1，住居 RA052） 2. カエデ属（試料 4，住居 RA053）

C：横断面，R：放射断面，T：接線断面，スケールは 0.1mm

写真図版



第 35 次調査区 遠景（南東から）



第 35 次調査区 東半部全景（北西から）

第 1 図版 第 35 次調査区 全景



完掘全景（南から）



カマド全景（南から）



土器出土状況（南から）



完掘全景（南から）



遺物出土状況（南から）



完掘全景（南から）



土器出土状況（南東から）



カマド全景（南東から）



土器出土状況（南東から）



完掘全景（南東から）



カマド全景（南東から）



遺物出土状況（南東から）



調査風景



完掘全景（南から）



カマド全景（南から）



土器出土状況（南から）



土器出土状況（西から）



RE 006 竪穴状遺構 完掘全景（南東から）



RD 034 土坑 完掘全景（南西から）



RD 035 土坑 完掘全景（南から）



RD 036 土坑 完掘全景（西から）



RD 037 土坑 完掘全景（北西から）



RG010 溝跡 完掘全景 (南東から)



RG011 溝跡 完掘全景 (南東から)



第9図版 RA 052 竪穴建物跡 出土遺物 (1)



第10図版 RA 052 豎穴建物跡 出土遺物(2)



第 11 図版 RA 053 竪穴建物跡 出土遺物



第12図版 R A 053・054 竪穴建物跡 出土遺物



第 13 図版 RA 054 竪穴建物跡 出土遺物



33



34



35



36



37



38



39



40



41



42



43



44

第 14 図版 RA 054 ~ 056 竪穴建物跡 出土遺物



45



46



47



49



48



50



51

第15図版 豎穴状遺構・土坑・溝跡 出土遺物

報告書抄録

ふりがな	にしかどいせき							
書名	西鹿渡遺跡							
副書名	宅地造成に伴う緊急発掘調査報告書							
編集者名	菊地 幸裕・今松 佑太							
編集機関	盛岡市遺跡の学び館							
所在地	〒020-0866 岩手県盛岡市本宮字荒屋 13-1 電話 019-635-6600							
発行機関	盛岡市教育委員会							
発行年月日	2019年7月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
西鹿渡遺跡 (第35次)	岩手県盛岡市三本 柳2地割28-1	03201	LE27-1046	39° 39' 52"	141° 09' 47"	20180409 ～ 0717	3.032	宅地造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
西鹿渡遺跡 (第35次)	集落跡	奈良時代	竪穴建物跡5棟、竪穴状遺構1 基、土坑4基、溝跡2条		土師器・須恵器・あか やき土器 コンテナ8箱			
要約	本遺跡は、これまでの調査で、奈良・平安時代の竪穴建物跡が40棟以上確認されている集落遺跡である。本調査においても奈良時代の竪穴建物跡が5棟検出されたほか、竪穴状遺構等の遺構が確認された。調査地点は、遺跡ほぼ中央部に位置し、当地域における該期の様相を解明する資料の一つとなった。							

西鹿渡遺跡

―宅地造成に伴う緊急発掘調査報告書―

令和元年7月31日 発行

- 編集 盛岡市遺跡の学び館
〒020-0866 岩手県盛岡市本宮字荒屋 13-1
電話 019-635-6600 FAX 019-635-6605
e-mail iseki@city.morioka.iwate.jp
URL <http://www.city.morioka.iwate.jp/shisei/moriokagaido/rekishi/1009437/1009438.html>
- 発行 盛岡市教育委員会
- 印刷 永代印刷 株式会社
〒020-0857 岩手県盛岡市北飯岡一丁目 8-30
電話 019-636-0011 FAX 019-636-0099
-